

第5学年 道徳科学習指導案

1 主題名 様々な地域の民間伝承から文化に触れる

内容項目 C— (18) 国際理解・国際親善

関連する内容項目 C— (15) 伝統と文化の尊重, 国や郷土を愛する態度

国際教育の視点 様々な文化や価値観を背景とする人々と尊重し合いながら共に生きようとする児童生徒の育成を図るための授業研究

2 教材名 日本の民間伝承「千葉の羽衣」とデンマークの民間伝承「アザラシのお母さん」

3 主題設定の理由

(1) ねらいとする価値や指導内容について

現在の世界状況は、異常気象や災害、戦争、食糧問題など様々な課題が山積みとなり、地球未来に向かって何をすべきかを考え続け、予測不可能な中、最善の方法を模索している。特に、「教育」は国の根幹を作る大きな役割を担う分野であるが故、その教育にどんな新しい価値を取り入れていけばよいのか、また、伝承してきた大切な価値を失わずに何を後世に受け継がせていけばよいかなどが、曖昧となっていることも少なくないであろう。そのような中、世界が共通に保持していきたい教育的な価値の一つと言えることは、「世界平和」に向かう子どもたちを育てることである¹。

ユネスコ憲章²の前文には「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和の砦を築かなければならない。相互の風習と生活を知らないことは、人類の歴史を通じて世界の諸人民の間に疑惑と不信をおこした共通の原因であり、この疑惑と不信のために、諸人民の不一致があまりにもしばしば戦争となった。」とあり、「相互の風習と生活を知ること」いわゆる異文化理解が平和への一歩となることが言及されている。また、「文化の広い普及と正義、自由・平和のための人類の教育とは、人間の尊厳に欠くことのできないものであり、かつ、すべての国民が相互の援助及び相互の関心の精神を持って、果たさなければならぬ神聖な義務である」と提唱されている。さらに、「平和が失われたいためには、人類の知的及び精神的連帯の上に築かれなければならない」と提言されており、相互に異文化理解をし、と精神的連帯感をもつことが、特に世界平和への鍵の一部となっていくのではないかと筆者は考えている。

そこで、異文化理解と精神的連帯のための一助として、「世界の絵本や昔話、神話、民話等（以降、民間伝承³とする）」を授業実践で扱うことに注視した。何故ならば、民間伝承を学ぶことにより、文化の違いを理解することができるだけでなく、人種や宗教等を越えた「人の感情や心」を動かす価値を見付けることができ、そこに精神的連帯に繋がる何かがあるのではないかと考えたからである。

本実践で扱う国であるデンマークの教育哲学者、N・F・S グルントヴィは、昔からの伝承文学や北欧神話が人間の生に重要な役割をもたらすことについて、「人間の生、人類とは何かを知るための陶冶材として、北欧神話や民衆の伝承、あるいは祖国デンマークの自然をうたった詩を使い、皆で唱和し思いやりや観劇

¹ 国際理解、国際協力及び国際平和のための教育並びに人権及び基本的自由についての教育に関する勧告：文部科学省

² 国際連合教育科学文化機関（1946年設立）

³ 君島久子 1989『日本基層文化の探究 日本民間伝承の源流』小学館 P4L7 民間伝承の定義について

を対話の中で語り合う。それを通じて郷土への愛と日常生活の尊厳、そして人生の神秘を知り、人間性を高めていく。」と言及している⁴。このことから、民間伝承は、その地域の人や風土を作り上げるものの一つであり、それを知ることによって、違う文化をもつ人の感情や心、風習の源泉の一部が見出すことができるのではないかと仮定できる。さらに、小長谷（2009）は「民話は親子をはじめとする家族間、または他人同士出会っても相互に価値観の共有を容易に確認できる」⁵と言及しており、自分とは違う地域・国の民間伝承を教材として扱うことで、子どもたちは、他文化と自国文化の間で人の感情や心に基づく価値観を共有できるのではないかと考えられる。さらに、Rebecca E. Evans は、「神話を通して、人を制限する境界線（言語、イデオロギー、宗教など）を越えた価値観と、互いの類似点を結び付けると、共通のコミュニティ意識が生まれる。」（This connectivity allows for cultures that share their values across the boundaries that limit them that are language, ideology, religion generates a shared sense of community when audiences connect the similarities between the variety of narratives.）⁶と言及している。このように、世界の民間伝承を教材として学習することによって、子どもたちは文化の違いのみならず、異文化間の共通価値にも目を向け、精神的連帯感をもつことができるのではないかと考えた。また、児童が身近な家族や友人の間だけでなく、世界中の人々が共有できる価値観を見つけることを通し、文化の表面的な理解だけでなく、人の感情や心にある深層的な繋がりにも触れ、人種や国境を越えて同胞性を感じ、相手を尊重できる児童の育成ができるのではないかと仮定し、本主題を設定した。

（２）児童の様子から教師の願いについて

本学級の児童の様子から、民間伝承を教材として、異文化の中でも同じような話の流れや価値が内在するものを扱うことで、違う国や地域に住む人々に対しても、同胞性を感じて精神的連帯を意識するのではないかと考えた。文化の「違い」だけでなく人の感情や心にある「同じ」価値観に視点を当てさせていくということである。

そこで、まず初めに自国文化を知るといった意味で、古典文学古事記から扱った。その際は、日本神話「因幡の白兎」「天地創造」「天の岩戸」「八岐大蛇」などから、今に繋がる命の存在を考える様子が見られ、日本人としての誇りをもつ様な振り返りを書く児童がたくさん見られた。

次に、国語「浦島太郎」の教材を使い、日本の遥か西側のアイルランドでも同じような民間伝承があることについて扱った。共通性がわかるように扱うことで、他国文化に対しても尊重する気持ちや人の感情や心に共感することで、相手の文化も尊重できるかもしれないと考えたからである。

学習中に２つの話を比較して考えた際は、日本は「亀」、アイルランドは「白馬」に乗り、また同じ城でも海の中の竜宮城と岸边の城など、それらの違いは地域の違いによるものであることを認識した。また、日本は「玉手箱を開けたい」、アイルランドは「馬を繋りたい」という感情で、王女様やお姫様との約束を破り、若者がお爺さんになり、歳をとると同じ話の流れとなり、「日本から歩いてアイルランドに行っているのかな、元は同じ民族なのかな、交流があったのかな」などを想像しながら人として同じ何かがあるという意見が出る様子も見られた。

児童は、他地域の民間伝承との類似性に視点を向けたことで、文化的な背景を考えるようになったり、

⁴ 清水満 1993『生のための学校 デンマークで生まれたフリースクール「フォルケホイスコーレ」の世界』新評論

⁵ 小長谷有紀 2009『昔話で親しむ環境倫理～エコロジーの心を育む読み聞かせ～』くろしお出版 p23

⁶ Spring 2018『The mythological perspective of modern media: Cross-cultural consciousness and modern myths』

違う文化をもつ人々を尊重するとはどういうことなのかということに考えたりする姿に変容し始めた。さらに、このような「人の感情や心」の共通性を考える学習経験を重ねていくことを通して、ユネスコ憲章が掲げる「精神的連帯感」をもって平和な世の中を作る人材として活躍していくことを願いたい。

（３）教材の特質や活用方法について

本時では、千葉市内の「千葉の羽衣」、デンマークの「アザラシのお母さん」を扱っていく。

千葉市内の「千葉の羽衣」には蓮が出てくる。千葉市はオオガハスが有名でありそのことについては、3年生でも学習しているので民間伝承に出てくる理由については容易に結び付けやすいと思われる。郷土愛という視点では、「千葉」の由来となる「千葉（せんよう）の蓮の池にあやかり、千葉氏が繁栄する」について話の中にもわかりやすく記述しており、自分の地域の歴史や言葉、民俗（伝説・昔話・風習・人情など）にも触れ、風土に育まれた文化について改めて考えることができるであろう。

デンマークの民間伝承では、「アザラシのお母さん」を使用する。なぜデンマークかというと、教師自身がデンマークやフィンランドに視察に行ったことがあり、児童に紹介したことがあったため、親しみのある国と考えて選定したという経緯がある。また、子どもたちが見慣れている地図の上では、日本は地球の東側に位置するが、正反対である西側の国の話を扱うことで、遠く離れた国同士であっても人の感情や心に触れる価値の共通性に気付くであろうと考えたからである。

「アザラシのお母さん」については、千葉市の羽衣伝説の流れと似通っている部分と、登場人物の違いに関して対比することが可能である。例えば、「天女」に対応する「アザラシ」に関しては、デンマーク周辺の大西洋では、多くのアザラシが生息すること、またアザラシは、ケルト神話に出てくる妖精に関係すること（スコットランドやアイスランドなどにも同様の民間伝承が存在する）など、風土や地域の違いで登場人物が変わってくることにについて比較をしやすい。

前時には、国内でもいくつか羽衣伝説があることを紹介し、地域によって登場人物が多少異なることについて触れることで、それぞれの地域で伝承してきたものや大切にしてくれているものについて考える時間としていきたい。さらに、本時の後にも民間伝承を扱うことを通して、今まで触れたことのない文化や異質と感じるような習慣などをもつ人と接するときに、どのような考え方が必要になってくるのかを思慮できるような児童に育てられるように、教材を選定して実践をしていきたいと考える。

4 指導構想（○は主題との関連）

（教師の願い）

○地域の民間伝承の類似性を扱うことで、児童は自他の文化的な背景の違いを尊重したり、人の心や感情に関する共通価値に気付いたりして、「精神的連帯」を感じながら平和な世の中を作りたいと考える姿になっていくことを願いたい。

7月 9月 国語「古典文学」郷土愛の視点

○古事記で出てくる神話について知り、日本の伝承文学から現在までつながっていることを考える。

9月 社会「食糧生産」国際教育の視点

○自給自足に課題のある日本について考え、今後、自分たちができることは何か考える。

9月 外国語「他国の教育」国際教育の視点

○フィンランドやデンマークの学校教育や社会教育について英語で説明を聞き、日本の様子と比べて考える。

10月 道徳「ムヒカ大統領がしたこと」国際理解・国際親善 国際教育の視点

○現在、地球上にある課題は、一地域一国内に留まる問題ではないことを踏まえ、広く世界の諸情勢に目を向けて考える。

10月 道徳「世界で一番強い国」（イギリスの著者）国際教育の視点

○本当の強さは何かを考え、武器で相手を制することが強さなのかについて話し合い、今もなお続く武力行使の地球的課題について考える。

10月 総合的な学習の時間「世界に目を広げよう」国際理解・国際親善 国際教育の視点

○インド、バングラデシュ、ブラジルの方と交流し、世界に目を広げていく。文化を知るだけでなく、植民地になった歴史や、国の設立に貢献した人物などにも触れる。

11月 国語 古典に親しもう「浦島太郎」

郷土愛、国際教育の視点

○浦島太郎とアイルランドの昔話と比べることで、文化の違いや共通性を見出すことを通して、異文化理解の基盤作りをする。

10月 道徳「3匹の子ぶた」国際教育の視点

○イギリスの昔話の当たり前を見直し、異なった風土や気候を理解したり、安全な家造りをしようとする異なる地域においても共通する価値について考えたり尊重しようとしたりする。

11月 道徳「様々な地域にある昔話から」郷土愛の視点

○羽衣伝説（京都丹波と静岡三保）について知り、その土地の風土や伝統的文化などを比べて考える。

本時 11月 道徳「様々な地域にある昔話から」国際教育、郷土愛の視点

○千葉市の羽衣伝説「千葉の羽衣」とデンマークフェロー諸島の「アザラシのお母さん」から、その土地の風土や伝統的文化等から来る違いを考えたり共通する人の感情や心を探ったりして、異文化理解の基盤作りをする。

11, 12月 総合的な学習の時間「世界に視野を広げよう」国際教育の視点

○異文化交流を通して、知りたい事を調べたり行動していきたいことなどを考えたりして発表する。

5 部会研究主題との関連

(1) 研究主題

地球的視野に立って、主体的に行動できる児童生徒の育成

目指す児童生徒像

- ① 自ら発信し行動することのできる児童生徒
- ② 自らの国の伝統・文化に根差した自己の確立ができる児童生徒
- ③ 異文化や異なる文化をもつ人々を受容し、「つながる」ことのできる児童生徒

本研究主題は、日本の「国際教育」の定義を参考に作ったものであり、国民国家を前提とした世界観から、地球社会を前提とし、「自己⇄地球」という世界観、いわゆるグローバルな世界観⁷も含め身近な地域の課題に対して、主体的に行動できる児童生徒の育成を目指していくものである。

これらの主題に意味する内容を受け、本部会の研究課題解明の方策を以下のように考えた。

(2) 研究課題

研究課題

- (1) 国際社会において、地球的視野に立った学びを構築する教科横断的な授業カリキュラムの授業研究
- (2) 様々な文化や価値観を背景とする人々と相互に尊重し合いながら生きようとする児童生徒の育成を図るための授業研究
- (3) 日本語指導等が必要な児童生徒の学習や生活に対する適応指導

特に視点を当てていきたい課題

- (2) 様々な文化や価値観を背景とする人々と相互に尊重し合いながら生きようとする児童生徒の育成を図るための授業研究

「様々な文化や価値観を背景とする人々と相互に尊重し合いながら」の捉え

本研究課題は、「様々な文化や価値観」について視点を当てている。本授業では、特に、様々な価値観について扱っていききたい。課題解明の方策としては、地球規模の諸問題に関わる内容において、児童が地球的視野を広めるという方策を掲げている。この方策を具体的に考えていきたい。

① 様々な価値観

研究課題の解決に向けて扱う教材として地域性による登場人物等の違いについて考えさせた。本時に至るまでに、浦島太郎（日本）とティルナノグの伝説（アイルランド）を比べることを通して、児童は、互いの文化を尊重していこうとする姿が見られた。

本時では、自分たちが住む千葉市の地域教材「千葉の羽衣」を扱い、郷土愛と国際教育を繋げていくものとする。千葉市の民間伝承の中からは、「天女」、デンマークフェロー諸島の民間伝承では「アザラシのお母さん」が登場する。地域によって登場人物等が違う理由を考えることを通して、違和感や異質さを越えて、相手の文化について理解しようとする姿勢を身につけさせていきたい。さらに、その

⁷ 日本国際理解教育学会編著『国際理解教育を問い直す 現代的課題への15のアプローチ』明石書店 2021

違いはそれぞれの風土の違いによるものと判断し、自他のもつ文化を尊重していこうとする気持ちをもつことができるような時間を目指し、「(2) 様々な文化や価値観を背景とする人々と相互に尊重し合いながら生きようとする」の課題を解決する基盤作りとしていきたい。

② 共通する人の感情や心を見つけることを通し、精神的連帯感を意識させる

本時では、千葉市とフェロー諸島の話の流れが類似している部分が多く、遠い国でも同じような内容となっていることに触れさせ、精神的連帯を意識するように仕向ける。文化の「違い」だけでなく人の感情や心に関する同じ価値観にも視点を当てさせていくということである。そうすることで、本部会が目指す「地球的視野に立って、主体的に行動できる児童の育成」の研究主題解明の一部となる『異文化や異なる文化をもつ人々を受容し、「つながる」ことのできる児童生徒』を目指しているのではないかと考えた。

(3) 課題解明の方策

教育活動全体を通じて

- (1) 地球視野に立った国際教育プログラムを考案し、総合的な学習の時間等や教科横断的な取組で具現化していく。
- (2) 特別の教科道徳における「国際理解・国際貢献」の内容項目やその他の内容項目（地球環境、エネルギー・資源、人口、平和、人権などの地球規模の諸問題に関わる内容）や特別活動等において、本部会としての実践を行うことで、児童生徒の地球的視野を広める。
- (3) 日本語指導教室等の授業実践・参観を通して、言語理解や文化的な理解を図り、児童生徒が学校生活に適応できるような指導方法を探る。

特に視点を当てていきたい課題解明の方策

- (2) 特別の教科道徳における「国際理解・国際貢献」の内容項目やその他の内容項目（地球環境、エネルギー・資源、人口、平和、人権などの地球規模の諸問題に関わる内容）や特別活動等において、本部会としての実践を行うことで、児童生徒の地球的視野を広める。

本実践を行う前に「世界で一番強い国」「ムヒカ大統領のスピーチ」の授業を行っている。この授業は、人類共通に与えられた課題、特に繰り返される戦争に対し、どう向き合っていくのかを考える時間となった。児童からは、「世界で一番強い国」は、優しさ溢れる国であることに世界中の人々が気付く、そこに重い価値を置くことが大切である、といった意見が多く出た。また、そういった考え方を押し付けるとまた争いになる、という意見も出たこともあり、まずは「相手の文化やバックグラウンドなどに目を向けることが大切」であり、争いを無くす一つの方策であることについても考えるようになっていった。しかし、そこまでの話し合いを聞き、「文化の違いについて頭では分かっている、それを受け入れることは難しい」という本質的な意見も児童から出ている。これに応えることが、本部会研究主題の解明に深く関わっていると考えた。

児童が今後、地球的視野を広める基盤として、まずは相手の文化を知り、異質性があっても相手の状況や文化背景にまで目を向け、理解をしていこうとする姿勢を身に付けていくことが必要であることを前提にし、世界の絵本や民間伝承を教材として「共通する人の感情や心」に目を向けさせて

いく。本実践により変容をした児童が、今後、地球規模の諸問題を世界中の人々と共に解決をしていく際に、平和的な解決を促すことができるような人材と活躍していくことを期待する。

6 本時の指導

(1) ねらい

千葉市の羽衣伝説「千葉の羽衣」とデンマークフェロー諸島の「アザラシのお母さん」から、その土地の風土や伝統的文化等から来る違いを考えたり、共通する人の感情や心を探ったりして、異文化理解の基盤作りをする。

(2) 展開

時配	○学習活動と発問 ◎主発問	ねらいに迫る手だて	予想される子どもの反応
3分	1 前時で学んだ、千葉市の民間伝承「千葉の羽衣」を振り返る。 ○千葉の羽衣では、どんなものが出てきましたか。また、どんな話の流れでしたか？	○「蓮、天女（風土や伝統的文化等からくる違い）」、「高価な羽衣が欲しい、幸せな生活が欲しい大切な妻がいなくなる悲しみ（共通する人の感情や心）」に関する発言を取り上げる。	・千葉の昔話には蓮が出てきた。 ・羽衣が欲しくて盗んだ。 ・奥さんは天に帰っていった。
デンマークフェロー諸島の昔話と、日本の昔話を比べて、違うもの（地域や風土）や同じもの（感情や心）を見付けよう。			
10分	2 アザラシのお母さんのお話を聞く。 ○今日は、デンマークの昔話を紹介します。出てくる登場人物や話の流れに注目しましょう。	○「千葉の蓮の花」と重ねながら話を聞くように促す。 ○黒板には「アザラシの皮を持っていく」「家族で幸せに過ごす」「故郷に帰りたい気持ちが強くアザラシの皮を着る」「大切な妻がいなくなる悲しみ」「離れても見守る」等の様子がわかるような画像写真を貼り、共通する人の心や感情に目を向けさせる。 ○デンマークの海では、たくさんのアザラシがいることがわかるように、デンマーク付近の海とアザラシが実際にいる画像を見せる。 ○自分の地域では野生のアザラシが見られないことを確認することで、風土の違いを認識させる。	・アザラシの皮は天女の羽衣とは違うな。なんか皮って違和感があるな。 ・デンマークは、アザラシがたくさんいるからかな。 ・千葉の羽衣の松では天女だったけど、デンマークはアザラシが天女のような感じなのかな。 ・日本にはこんなにアザラシがいるわけではない。 ・アザラシと共に生きている。

10分	3 デンマークの地域性との違いを考えてワークシートに書いて発表する。 ◎地域によって違うと思ったものをワークシートに書き、発表しましょう（ねらい：その土地の風土や伝統的文化等から来る違いを考える）。	○『アザラシのお母さん』という題名にあるように、デンマークの海ではアザラシがたくさんいるということを知ること、民間伝承と繋げて考えられるようにする。 ○天女とアザラシ、洞穴と蓮などの違いについて気付かせ、地域性が出ていることについて特に目を向けさせる。	・日本では自然にアザラシがいることはほとんどないが、デンマークの海にはアザラシがたくさんいるから昔話にアザラシが出ているのかもしれない。
10分	4 2つの国の物語の登場人物に共通する心情や心について考える。 ◎アザラシのお母さんと羽衣伝説の登場人物に共通する心は何でしょう（共通する人の感情や心を探る）。 ○なぜ、羽衣やアザラシの皮を欲しがったのでしょうか。また、幸せな暮らしをしていたのに、天女やアザラシが羽衣や皮を着たのでしょうか。 ○そういう気持ちになった理由を考えましょう。	○話の流れが似ていることについて、「高価なものがほしい」「大切な人を失いたくない」「家族を失ったら悲しい」「故郷に帰りたい」等の気持ちの共通性について気付かせる。 ○遠い国の人であっても、人の心情や心は同じであることに気付かせるために、前時に扱った「千葉市の羽衣」の登場人物の心情を参考に考えるよう助言し、精神的連帯感をもたせるようにする。 ○「盗んだ」「隠した」などの行為に目を向けるのではなく、何故そういう行為に至ったかという心情面の理由を考えるよう助言し、めあてから逸れないようにする。	・アザラシの皮は高価で欲しくなってしまう。 ・女の人と幸せな家庭を築きたくなった。 ・おうちに帰りたいという気持ちは同じ。 ・アザラシが近い存在だから、その国にとっては大切な生き物。違和感はあるけれど。 ・人間がもつ欲望は、どの国も地域でも同じなのかな。 ・国が違っても考えることって一緒のところもあるのかな。
12分	5 学習を振り返る。 ○アザラシのお母さんの話や羽衣の松の話から「違うもの」や「同じ感情や心」について考えたことで、思ったことを入力しましょう（ギガタブ使用）。	○それぞれの地域が違う風土をもち、大切にしているものがあることを確認する。 ○他国でも人の感情や心の動きが同じだったり似ていたりすることに気付かせる。 ○デンマークの小学生を画像で見せ、風土は違うが同じような感情や心があることについて考えさせる。	・それぞれの地域が大事にしていることを尊重していきたい。 ・欲しい、幸せになりたいなどの感情は、どの国も同じなのかな。 ・他国の小学生も、私たちと同じように感情や心を動かしている。

アザラシのお母さん

むかしむかし、若い漁師が魚を釣りに海岸に行きました。

海岸にある大きなほら穴のそばを通りかかると、穴の中から楽しい歌声が聞こえてきます。

「おや？ この声は？」

漁師がほら穴をのぞくと、ほら穴の岩の上にアザラシの毛皮がたくさん並んでいました。

アザラシの毛皮を町へ持って行けば、とても高い値段で売れます。そこで漁師は目の前にあるアザラシの毛皮を一枚盗むと、急いで家に持って帰って箱の中に入れて鍵をかけました。

さて、海で働いた漁師は家へ帰る途中、またあのほら穴のそばを通りました。漁師はほら穴の中をのぞきましたが、もうアザラシの毛皮は一枚もありません。でも穴の近くで、裸の女の人がシクシクと泣いていたのです。「もしもし、娘さん。どうしたのですか？」女の方は、顔をあげました。それは、とても美しい人でした。

「わたくしは、アザラシなのです。みんなと一緒にここに毛皮を脱いで、穴の中で遊んでいました。そして帰ろうとすると、わたくしの毛皮だけがありません。毛皮がなくては、海に帰れないのです」

そう言って女の方は涙をこぼしました。漁師は迷いました。（あのアザラシの毛皮は、この娘の物だったのか。可愛そうだから、毛皮を返してあげようか。・・・でもそうしたら、この娘は海に帰ってしまう。）考えた漁師は、やさしく話しかけました。

「それは、お困りでしょう。わたしも一緒に探してあげたいけれど、もう暗いから明日にならないと無理です。

汚い家ですが、今夜はわたしの家にお泊まりなさい」

女の方は、しばらく考えていましたが、

「それでは、お世話になります」

と、言って立ちあがりました。

さて、漁師の家に来た女の方はとてもやさしい人で、漁師のためにおいしいごはんを作り、着物を洗濯して家の掃除をしてくれました。次の朝、漁師は女の方に言いました。

「わたしは、あなたを海に返したくなりました。

もう海へ帰るのはあきらめて、わたしのお嫁さんになってくれませんか？」

女の方も、漁師の事が好きになっていたので、

「はい。そうさせていただきます」

と、答えて、漁師のお嫁さんになりました。

二人は貧乏（びんぼう）でしたが、とても幸せに暮らしました。やがて二人の間に子どもが次々と産まれて、女の方は七人の子どもたちのやさしいお母さんになりました。けれどもお母さんは時々一人で海辺に行って、悲しそうに沖の方を見つめている事がありました。美しい奥さんと可愛い子どもたちに囲まれて、漁師は本当に幸せでしたが、あの毛皮を隠した箱のカギだけは、いつも体から離しませんでした。

でも何年かたったある日、漁師は大事な箱のカギをうっかり家に置き忘れて海に出かけたのです。

「あら、何のカギでしょう？」

掃除をしていてカギを見つけたお母さんは、漁師が大切にしている箱の事を思い出しました。

「あの人はあの箱の中に、何を大事にしまっているのかしら？」

気になったお母さんは、そのカギで箱を開けました。そして中に入っていたアザラシの毛皮を見つけた

のです。

「まあ、これはわたしの毛皮！」

「ああ、これで海に帰れるわ」

その時、外で遊んでいる子どもたちの楽しそう声が聞こえて来ました。

「どうでしょう？ あの子たちを置いて海に帰るなんて、わたしには出来ないわ。・・・でも」

お母さんは毛皮を見ているうちに我慢が出来なくなり、ついに毛皮を着てしまいました。

さて、海で釣りをしていた漁師は、家にカギを忘れた事に気付きました。

漁師は祈る様な気持ちで、急いで家に帰りました。

漁師が箱の所に行ってみると、すでに箱のふたが開いていてアザラシの毛皮がなくなっていました。

「まっ、まさか！ お母さんは！ お母さんは、どこへ行った？！」

夜になっても、次の日になっても、お母さんは帰って来ませんでした。

子どもたちも漁師も、お母さんとの幸せな日々を思い出して何日も何日も悲しみました。

ある日、漁師は重い気持ちで海に出かけました。するとどこからか、悲しい声が聞こえて来ます。

♪わたしは、アザラシ。♪海の娘。♪海に帰れてうれしいけれど。♪それでもやっぱり、悲しいの。

♪可愛い子どもは、どうしているの？♪わたしの可愛い、子どもたち。

一頭のアザラシが、漁師の小舟のまわりを泳ぎました。アザラシの目からは、涙がこぼれているようでした。子どもたちが海辺で遊んでいると、やさしい顔をした一頭のアザラシがそっと岩かげに近寄って、きれいな魚や珍しい貝を投げしてくれる事もありました。そして漁師が釣りをしているといつもあの悲しい声が聞こえました。

この海では、今までよりも何倍も魚が捕れる様になりました。お母さんは帰って来ませんでしたが、漁師はその魚を売って子どもたちを立派に育てたということです。